

# 叙階の秘跡

叙階 - ordinatio (ordo: : 機関、団体・組織、身分)

## 1. 旧約の司祭職

### ◆ 神はイスラエルを選ぶ

📖 「あなたたちは、わたしにとって／祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」出 19:6

📖 「主がモーセにこう仰せになったからである。「レビ族のみは、イスラエルの人々と共に登録したり、その人口調査をしたりしてはならない。むしろ、レビ人には掟の幕屋、その祭具および他の付属品にかかわる任務を与え、幕屋とすべての祭具の運搬と管理をさせ、幕屋の周囲に宿営させなさい。」民 1:48-50

## 2. 旧約の司祭職の限界

📖 「祭司の唇は知識を守り／人々は彼の口から教えを求める。彼こそ万軍の主の使者である。だが、あなたたちは道を踏みはずし／教えによって多くの人をつまずかせ／レビとの契約を破棄してしまったと／万軍の主は言われる。わたしも、あなたたちを／民のすべてに軽んじられる価値なき者とした。あなたたちがわたしの道を守らず／人を偏り見つつ教えたからだ。」マラ 2:7-9

📖 「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。」へブ 5:1-3

📖 「いったい、律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。従って、律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人々を完全な者にすることはできません。もしできたとするなら、礼拝する者たちは一度清められた者として、もはや罪の自覚がなくなるはずですから、いけにえを献げることは中止されたはずではありませんか。ところが実際は、これらのいけにえによって年ごとに罪の記憶がよみがえって来るのです。雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができないからです。」へブ 10:1-4

## 3. 真の大祭司である

📖 「この方（キリスト）は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。」へブ 7:27

📖 「なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人々を永遠に完全な者となさったからです。」へブ 10:14

📖 「そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」へブ 5:9-10

📖 「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。」1テモ 2:5

📖 「このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。」へブ 7:26

## 4. キリストの唯一の司祭職への二通りの参与（信徒の共通司祭職と職位的・位階的・役務的司祭職）

📖 「わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。」黙 1:6

「(神の民の司祭職) 人々の中から選ばれた大司祭である主キリストは (へブ 5・1～5 参照)、新しい民を「自分の父である神のための王国および司祭とした」(黙示録 1・6、5・9～10 参照)。すなわち、洗礼を受けた者は、再生と聖霊の塗油とによって、霊的な家および聖なる司祭職となるよう聖別される。それはかれらがキリスト信者のあらゆるわざを通して霊的供え物をささげ、やみから自分を感嘆すべき光へとかれらと呼ばれた者の力を告げる者となるためである (1ペトロ 2・4～10 参照)。したがって、キリストのすべての弟子は、くじけずに祈り、ともに神を賛美しつつ (使徒行録 2・42-47 参照)、自分を神に喜ばれる聖なる生きた供え物としてささげ (ローマ 12・1 参照)、あらゆるところにおいてキリストを証明し、尋ねる人に対しては自分たちの中にある永遠の生命の希望について解明しなければならない (1ペトロ 3・15 参照)

信者の共通司祭職と職位的または位階的司祭職とは、段階においてだけでなく、本質において異なるものであるが、相互に秩序づけられていて、それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の司祭職に参与している。職位的司祭は、自分が受けた聖なる権能をもって司祭的な民を育成し、治め、キリストの代理者として聖体の犠牲を執り行ない、それを民全体の名において神にささげる。信者は、自分が持つ王的司祭職の力によって、聖体の奉獻に参加し、また諸秘跡を受けること、祈り、感謝、聖なる生活による証明、自己放棄、行動的な愛をもって、この王的司祭職を行使する。」(教会憲章 10)

「したがって、大司祭である主イエズス・キリストは、司祭たちに補佐されている司教の中に、信ずる者たちのあい

だに現存する。事実、神である父の右にすわっている主は、自分の司教たちの集団の中にいないことはない（注 53）。主はまず司教たちのすぐれた奉仕を通してすべての国民に神のことばをのべ、信ずる者に信仰の諸秘跡を絶えず授け、司教たちの父としての務めによって（1 コリント 4・10 参照）超自然の再生をもって新しい成員を自分のからだに合体させ、さらにかれらの英知と賢慮によって新約の民を永遠の幸福への旅において導き、方向づける。（教会憲章 21）

「司教は使徒の後継者として、すべての人が信仰と洗礼とおきての遵守を通して救いに達するように、天上と地上のすべての権能を受けた主から、あらゆる国民に教え全被造物に福音を宣教する使命を受けた（マタイ 28・18、マルコ 16・10～16、使徒行録 26・17 以下参照）。この使命を果たすために、主キリストは使徒たちに聖霊を約束し、ペンチコステの日、聖霊を天から派達した。それは使徒が、聖霊の力により、地の果てまで、諸国民と諸民族と王たちの前で、主の証人となるためであった（使徒行録 1・8、2・1 以下、9・10 参照）。主が自分の民の牧者たちにゆだねた任務は真の奉仕であって、それは聖書の中で意味深く「ディアコニア」すなわち奉仕と呼ばれている（使徒行録 1・17、25；21・19、ローマ 11・10、1 テモテ 1・12 参照）。（教会憲章 24）

「なお、キリストに代わって集会をつかさどる司祭が神にささげる祈りは、聖なる民全体と、参会者一同の名によってとなえられる。聖なる典礼が、神的な目に見えないものを示すために用いる目に見えるしるしは、キリスト、または教会によって選定されたものである。したがって、「われわれの教訓のために書かれたこと」（ローマ 10・4）が朗読されるときだけでなく、教会が祈り、歌い、行なうときには、これに参加する人の信仰が養われ、心は神にあげられる。こうして人々は霊的な礼拝を神にささげ、その恩恵をいっそう豊かに受けるのである。」（典礼憲章 3 3）

- 叙階された任務者（奉仕者）は、① 教えること（教職）、② 祭儀をつかさどること（祭職）、③ 司牧すること（牧職）をとおして神の民に仕える。
- 秘跡は、キリストによって定められた行為で、聖霊の力によるキリストご自身の行動です。従って、キリストを代理する司祭の心の状態を問わずに、必ず完全な行為です。

## 5. 叙階の秘跡の三つの段階（司教、司祭、助祭）

### ◆ 司教

使徒たちはこのように崇高な任務を果たすために、かれらの上にくだった聖霊の特別な注ぎかけによってキリストから豊かにされ（使徒行録 1・8、2・4、ヨノ、ネ 20・22～23 参照）、自分たちもその助力者たちに按手をもって霊的たまものを伝授した（1 テモテ 4・14、2 テモテ 1・6-7 参照）。このたまものは、司教聖別においてわれわれにまで伝えられてきている（江封）。聖なる教会会議は、教会の典礼の慣習と聖なる教父たちのことばによって、最高の司祭職、聖なる役務の頂点と呼ばれている叙階の秘跡の充満が司教聖別によって授けられる、と教える。司教聖別は、聖化の任務とともに、教える任務と治める任務をも授ける。しかし教え、治める任務はその本性から、司教団体の頭ならびにその構成員たちとの位階的交わりの中でしか行使できない。事実、按手と聖別のことばによって聖堯の恩恵を授けられ（注 56）、聖なる霊印をしるされる結果（注 57）、司教たちがすぐれたそして見える方法で、師・牧者・大司祭であるキリスト自身の代理者となり、その役目を受け持つ者となることは、特に典礼儀式と東方および西方の教会の習慣とによって示される伝承から明らかである。新しく選ばれた者を叙階の秘跡によって司教団に入れることは、司教たちの務めである。」（教会憲章 21）

### ◆ 司祭

「このからだの中では「すべての構成員が同じ働きをするものではない」（ローマ 12・4）。役務者は信者の社会において、いけにえをささげ、罪をゆるすために、叙階の聖なる権能を持ち（注 6）、また人々のためにキリストの名において公に司祭としての務めを行なう。それゆえ、キリストは自分が父から派達されたように使徒たちを派達し（注 7）、さらにこの使徒たちを通して、かれらの後継者である司教たちを自分の聖別と使命とに参与させた（注 8）。そして司教の奉仕の任務は従属的段階において司祭たちに伝授された（注 9）。こうして、司祭団の構成員となった司祭たちは、キリストから託された使徒的使命を正しく果たすために、司教団の協力者となる（注 10）。

司教団に結ばれている司祭の務めは、キリスト自身がその「からだ」を建設し、聖化し、統治する権威に参与するものである。したがって司祭の司祭職はキリスト教入信の諸秘跡を前提とするが、別個の秘跡によって授与されるものである。この秘跡は、聖霊の塗油によって特別な霊印を司祭にしるし、こうして、司祭は「かしら」であるキリストの代理者として行動できるように、司祭キリストの姿に似たものとなる（注 11）。（司祭の役務と生活に関する教令 2）

### ◆ 助祭

聖職位階の下位の段階に助祭があり、「司祭職のためではなく、奉仕のために」按手を受ける（注 110）。助祭は秘跡の恩恵に強められて、司教およびその司祭団との交わりの中で、典礼とことばと愛の奉仕において神の民に仕える。所轄権限所持者からの指定の範囲内において、助祭は次の務めを行なう。すなわち、荘厳に洗礼式を執行し、聖体を保管し、分け与え、教会の名において婚姻に立ち合い、祝福し、死の近くにある者に聖体を運び、信者たちのために聖書を朗読し、人々に教え勧告し、信徒の祭礼と祈りを司会し、準秘跡を授け、葬儀と埋葬を司式する。助祭は愛と管理の務めに専念し、聖ポリュカルボスの次の勧告を忘れてはならない。「すべての

人の奉仕者となった主のまことの教えに従って歩み、あわれみ深く、熱心であれ」(注 111)。(教会憲章 29)